私の名前は高町フーカ

ネコカブリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の名前は高町フーカ

【Ｎコード】
Ｎ３６７０Ｕ

【作者名】
ネコカブリ

【あらすじ】
ここは魔界の最下層、地獄の一箇所、禍々しく光る赤い月の夜、そこで一体のプリニーが転生の時を迎えようとしていた。・・・・・

はじめまして皆さん私はネコカブリといいます、自分は小説を書くのは初めてです。だから凄く緊張しています、俗に言う処女作という奴です、

警告

この小説にはキャラ崩壊、ご都合主義、俺設定など、さまざまな皆さんが不愉快になるかもしれない表現が含まれています、なにぶんこういうものを書くのは上で言ったとおり初めてで。「ん？なにかおかしいぞ？」と思うところもあるかもしれません、しかしそういうところがあっても暖かく見守って下さると嬉しいです。

そして何より文才がないので１話、１話かなりの不定期更新になると思います、

それでもいい、という方はどうぞ、御覧になってください。

第０幕～転生～（前書き）

多少、編集をしました、

第０幕～転生～

ここは魔界の最下層、地獄の一箇所、禍々しく光る赤い月の夜、そこで一体のプリニーが転生の時を迎えようとしていた

「なんか、いざってなるとちょっと怖い・・・かな」

そのプリニーの名は風祭フーカ、かつてなりそこないのプリニーでありながら、魔界・天界・人間界を巻き込んだ大災厄、〝恐怖の大王〟を打倒した英雄の一体である。その大災厄から約３００年、彼女はなりそこないのプリニーから普通のプリニーになり、世界征服をたくらんだ罪を償っていた、そして今晩やっと転生の時を迎えたのだ。

「随分と辛気臭い顔をしているな。」

「だれ！？」

いきなり後ろから声をかけられ、彼女は驚き振り返った。そこにはかつて彼女と共に恐怖の大王を打倒し、今では彼女の雇い主でもある男が立っていた。

「だれ、とは随分な言い草だな小娘。」

今彼女に話しかけた男、彼もまた彼女と同じ英雄の一人、地獄のプリニー教育係、暴君ヴァルバトーゼである。

「ヴァルっち、なんで「ここにいるのか、か？」・・・うん、」

そう、それは当然の疑問。彼女は今日ここで転生をすることは誰にも言っていないのだ。プリニーになった彼女をまだ「おねぇさま」と慕っている妹（デスコ）にも、もちろん今ここにいる彼女の雇い主（ヴァルバトーゼ）にも言っていない。他の仲間だって知らないはずだ。それなのになぜ？

「ふん、夜中にこっそり抜け出すプリニーを見かけたのでな。ちょうど今日は赤い月の夜だったかと思い出し、見送りに来てやったのだ。感謝しろよ？小娘。」

「そうなんだ。ありがとね、ヴァルっち。」

彼が最初ここに来たことに気づいたとき、彼女はとても嬉しくなった、しかしそれ以上に彼女は空気を読めと思ってしまった。

「なんだ小娘？貴様らしくないな、いつもの気概はどうした？」

「うっさいわねぇ・・・あたしだってブルーな気持ちになることもあるわよ。それに何のためにあたしが黙って出てきたかわかってんの？名残惜しくなるじゃない、やっとこんな体から開放されるってのに、それが・・・嫌になるじゃない」

「小娘。貴様泣いて。」

彼女の目から涙がこぼれる。こんな体、本当のことを言うとさっさと転生しておさらばしてしまいたい、と彼女は思っていた。だが赤い月の夜に転生をするということは、彼らと、今まで喜怒哀楽を共にした仲間と別れるということだ。確かにそれは一時的な別れかもしれない。しかし、だからといってまた彼らと会えるかはわからないのだ。罪を償ったプリニーは赤い月の夜に転生し、今までの記憶を罪と共に洗い流し新しい生を歩む。まれに前世の記憶を持ったまま転生する者もいるがそんなのは例外中の例外である。彼女は、自分がそんな例外に入るとは思っていなかった。だから彼女はプリニーになった当初、必要なヘルがたまっても転生をする気はなかっ

たのである。自分はプリニーになってしまったが、中身は何も変わってない、このまま仲間たちと楽しく過ごしていければいいとすら考えていた。だが、そんな中彼女に芽生えてしまった感情、それが彼女に転生を決意させた。その原因は今目の前で思案顔をしている彼にあるのだが、どこかずれた思考回路をしている彼のことだ、絶対に気づいてないだろう。

彼女がそんなことを考えているとは知らず、今までずっと思案顔をしていた彼が我が意を得たりというような顔をして喋りだした

「・・・そうだ小娘！餞別代わりだ！一つ貴様と約束をしてやろう！！」

「約束？」

いつも唐突にわけのわからない事を言う彼だが、今の言葉はそれに輪をかけて意味がわからなかった、彼が発した言葉に彼女は首を傾げる、今から転生する彼女にいったい何を約束するというのだろう？

「そうだ！約束だ！俺は転生した貴様を必ず見つけ出し、そしてまた俺の仲間に加えてやる！貴様がどこにいようと、どんな姿をしていようと、必ず、だ！！」

「・・・・・・・・・・・」

「ん？どうした小娘？うれしすぎて言葉も出ないか？」

「ぷっくくくくく・・・・・・あはははははははははははははははははははははは！！」

確かに嬉しい、嬉しくてさっきとは違う涙が出そうだ。しかし今はそれよりも面白かった、まさか乙女心のおの字もわかってない彼から、そんな言葉が出るとは思っていなかったから。

「なっなにがおかしい？」

「いやごめんごめん、ちょっと意外でさ。まさかそんなこと言ってくれるとは思ってなかったから、つい笑っちゃった。ふふふ、でもさ、あたしがヴァルっち達の事忘れてたらどうするの？」

笑いながらたずねる、しかし彼女は彼が言うであろう言葉をもう予想していた。

「問題ない、貴様と俺達の絆はそのようなことで切れるものではないと信じているからな。」

「ぷっふふっふ・・・うんそっか、じゃあ、あたしも信じてみようかな。ヴァルっちとの絆を・・・」

予想道理の言葉に彼女はまた笑ってしまいそうになる、しかし彼女はそれをこらえ彼に言葉を返した。いつの間にか、こぼれた涙は乾いていた。

「そろそろのようだな。」

「そう、みたいだね、」

そろそろ彼女の転生の順番が回ってきたらしい。あふれかえるようにいたプリニーたちも今では片手で数えられるほどになっている。

「じゃあねヴァルっち、皆にもよろしく言っといて、とくにデスコには・・・ね、あの子、きっと泣いちゃうから。」

「だろうな、まったく最後の最後まで手間のかかる小娘だ。」

最後の最後に憎まれ口をたたくとは、彼らしいといえば彼らしいが、彼女的には納得できなかったらしい。だからか、彼の言葉に対して彼女は文句を言う。

「むきゃーーー！！なによその言い方！ヴァルっちの方こそ最後の最後まで乙女心を全然わかってないんだから！女の子はね？こういうときにあまーい言葉をささやかれたいの！」
「そうか？ならこういうのはどうだ？・・・必ず迎えにいってやる、だからそれまで待っていろ。」

彼はその言葉に少し苦笑いしながら自分が考えた精一杯の甘い言葉を言う。しかしプリニーに対して甘い言葉をささやく吸血鬼というのもなかなかにシュールな光景である。

「うーん・・・まぁそれで妥協しとくわ、もともとヴァルっちにそういう期待は一切してないし。」

笑いながら言葉を発する彼女、その顔には最初の頃にはなかった明るい笑顔が咲いていた。

「そこはかとなく失礼だな貴様。」

少し不満そうな顔をする彼、自分ではなかなか高評価の言葉だったのだろう。そんな彼をクスクスと笑いながら彼女はなだめた。

「まぁいいじゃない、気にしない気にしない、じゃ、本当にもう行くから・・・絶対迎えに来てね？・・・待ってるから。約束よ？」
「あぁ、約束だ、安心しろ俺は約束を破らない。俺を信じて待っていろ。」
「うん、信じてる。」

ここでプリニー、風祭フーカの物語は一旦幕を下ろす。

そしてその約束から十年

「ほらなのは！早く行かないとバスに乗り遅れちゃうわよ！？」

これから始まる物語は、風祭フーカの物語ではない

「にゃにゃ！！おねぇちゃんまってよ～。」

ここは日本海鳴市、そこに住む、未来において何度も世界を救う魔法少女高町なのはと。

「はいはい、おいてかれたくなかったら走る走る～。」

その姉高町フーカの物語である。

第０幕～転生～（後書き）

どうも作者です、こんなつたない文章を読んでいただきありがとうございました。これを読んだ後に感想をいただけると嬉しいです、もちろん厳しい意見も大歓迎です。ですが作者は誹謗中傷を己の糧にする機能は搭載されておりません、そこのところは了承しておいて下さると助かります

第1幕～崩れた日常～（前書き）

十年前プリニーからの転生を果たした風祭フーカ、彼女は高町フーカとしての人生を生きていた。

無論、転生する前の記憶を、すべて洗い流して・・・

第1幕～崩れた日常～

夢を見ている

私の周りには見たことのない化け物の群れ、私はそれを手に持った斧で切り潰していく。目の前に群れていた化け物どもをすべて殺し終えたころ、いきなり場面が変わる。

私は知らない人達の会話の輪に入っていて、楽しく喋ってる。でも私と喋っている人たちの顔に影がかかってわからない。背が私より低くて、緑色の帽子をかぶっている男の子。ぴっちりとしたボディースーツみたいな服を着ていて、たまに背中から触手みたいなものが出てくる女の子。そして羽を生やした桃色の髪の天使さま。とても楽しいのに、なぜか顔がわからない、また場面が変わる。

今度は・・・多分誰かが寝ている寝室、私はその人のお世話をしていて、今はその人を起こしに来たのだ。その人のことを布団の上からゆする・・・おきない。今度は上に乗って踏みつける・・・・おきない。腹が立った私は何を思ったのかいきなり回りだした、するとその人の頭にたらいが落ちた、まるでコントみたいだ、少し笑ってしまう。するとその人は不機嫌そうにおきてきた、やっとおきたか、と私はあきれながら水の入った桶を差し出す、顔を洗い目が覚めたのか。その人は私にお礼を言って部屋を出て行った、やはり顔に影がかかって見えない、さらに場面が変わる。

まただ、またこの場面に来た。いつもあの夢を見ていると、どんな場面だろうと必ずといっていいほど最後にはこの場面になる。そ

してこの場面にくると必ず夢が覚める。

そこは爛々と光る赤い月の夜、私の前にさっきの男が立っていた。その人が何かを喋っている、相変わらず顔が見えない、それに何を喋っているのかもわかりずらい。そしてその人が私に近づいてくる、いつもここで目が覚めるのだ。だから私は、あぁもうそろそろこの夢も終わりかぁと考える。

だがその日は違った、このまま覚めると思った夢は続き、初めて夢に出てくるその人の顔を見ることができたのだ。その顔はとても美しかった。すらっとした顔立ち、強い意志を感じる切れ長の目、そして少し笑っている口から見える牙。そのすべてが私を魅了した、初めて見るはずなのに、とても懐かしく感じる。そう、まるで何年もその顔を見てきたかのように。数秒のことのはずなのに、永遠に感じるその時間、だがそれは唐突に終わりを告げた。目の前のその人が喋りだしたのだ。

「小娘」

今まで聞こえづらかったことが嘘のように鮮明にその人の声が聞こえた。私が呆けているのを、無視しているのか気づいていないのかわからないが、その人は言葉を続ける。

「約束だ、俺は必ずお前を迎えに行く。まだまだ時間がかかるだろうが、待っていろ、小娘。」

私は疑問に思った、約束とは何だ？迎えにいくとは？、そんなことを思っていると、その人の体が透けてきた。（だめだ！）私は直感でそう思った、このままその人が消えてしまえば、もう会えなくなる、そんな気がしたのだ、そして私はその人を引きとめようと声

をかけようとした、だが。

「・・・・・！！・・・ぁ・・・・・！！！！？？？？？」

声が・・・でない？（だめっ！まって！お願い。）それでも私は何とか声を出そうとする。しかし、思いとは裏腹にその人の体はどんどん透けていく。すると今度は自分の体の感覚がなくなっていくのがわかった。だめだこのままでは夢が覚めてしまう（お願い、まって。だめ！いっちゃだめ！）もう腰の辺りまで感覚がなくなってきている、自分が立っているのかどうかもわからない。だがそれでも、その人を引き止めるため必死に腕を伸ばそうとする、その時。

「じりり」

けたたましい音が鳴り響く。その音と共に私は一気に現実へ引き戻された。

「まって！！・・・・あ、ぇ？」

ガバ！っと布団を押しのけて私は飛び起きた、手は前に伸ばしたままである。傍から見れば随分と滑稽な格好であろう、こんなのは一つ下の妹にはとても見せられない。そんなことをボーっとしながら考えていると、ひたすら自分の仕事をまっとうしている目覚ましに気づく。私はそれに手を伸ばし目覚ましのスイッチを切った、さっきまで響いていた騒音は消え、部屋に朝特有のシーンとした空気が広がる、その静寂の中で私は、さっき見た夢のことを思い出していた。

（なんだったんだろう、約束って。それに、なんだかいつもと雰囲

気が違ったような・・・うーん、わっかんないなぁ。）

そんなことを思いながら、私はベッドから起き上がる。さっき目覚ましを見たときの時刻は5時半、学校に行くにはまだまだ早すぎる時間だ。私は今日の身支度をしながら、ふと夢の中に出てきた男の人のことを思い出した。

（それにしてもあの男の人、かっこよかったなぁ・・・・・）

いつの間にか私の考えは夢で初めて見たあの人のことにシフトしていた、初めて見た彼の顔は本当に素敵だった。あれほどかっこいい顔をしている男の人を、私は兄以外に見たことがない。

「あの人が見れるなら毎日夢を見てもいいかも」

自分で言うのもなんだが私、結構面食いである。

コンコン。ドアをノックする音がする、おそらくママだろう。私を起こしに来てくれたのか、そう思った矢先、ドアの向こうから声がした。

「フーカ、そろそろ起きてるでしょ？ちょっと朝ごはん作るの手伝ってくれない？」

「うん、わかったわ、ママ。すぐ降りるから先に行ってて。」

そうママの言葉に答えて、私は急いで服を着替えだした。もう夢のことなど私の頭の中には無かった、どっちかというとこれから作る朝食のことで頭がいっぱいだったのだ。しかし、このときの私は気づきもしなかった、その日から、私はあの夢を見ることはなくなり。そして、それに呼応するかのように自分の周りの日常が崩れ去っていくことを。仕方ないことだが、私はこれっぽっちも気づいて

いなかったのだ。

私の名前は高町フーカ第1幕～崩れた日常～

服を着替え終わった私は足早にママが待っているであろう台所に行く、そこにはエプロンをつけたママが立っていた。

「ママ、お待たせ、私は何を手伝えばいいの？」
「あらフーカまずはおはよう、よ？」

ここで私の家族を紹介していこうと思うわ。今私に軽く注意をした人が私のママ、名前は高町桃子。翠屋っていう喫茶店でパティシエをしてる私の自慢のママ。でも怒るとすっごく怖いのよね、うちではママを怒らせようなんて猛者はいないくらいなんだから、どれくらい怖いのか・・・わかるでしょ？

「あはははは、ごめんなさい。そんじゃもう一度、おはようママ、私は何をすればいいの？」
「はい、おはようフーカ。そうねぇ、魚も焼いちゃったし、スクランブルエッグは今私が作ってる途中だしねぇ。パンはもうトースターに入れちゃったから・・・そうだ！サラダを作ってくれない？」
「わかったわママ、ねぇ盛り付けとかもしちゃっていい？」
「えぇ、フーカに任せるわ。しっかりきれいに盛り付けてね？」
「任せといてよ、」

そういって作業に取り掛かる私、こんなふうに私は朝ご飯の手伝いをすることがある、今から大体5～6年くらい前に、料理を覚えるためにはじめたのだが、これがなかなか楽しく、それなりに料理を作れるようになった今でも続けている。私の習慣みたいなものだ。

「らーららっらららーらっららららららららららーら♪」

歌を歌いながらご機嫌に私はレタスをちぎっていく、決して大きすぎず、だからといって小さくもならない、そんな風にちぎるのが結構難しいのだ。そうこうしているうちに、レタスをちぎり終わる。さて、他の野菜はもう切ってしまったし、後はこれらを器に盛り付ければいいだけなのだが・・・ふむ。

「なーんか、ぱっとしないわねぇ」

そう思った私は冷蔵庫を開ける。すると、あるではないか、いいものが。しかし使うにしても一応ママに確認を取らなければ。

「ねぇママ！」
「んー、どうしたのフーカ？」
「冷蔵庫にあったトマト使っていい？」
「あぁ、あれね、いいわよ。サラダに使うの？」
「うん、」
「そう、こっちももうすぐ終わるから、それが終わったらお皿とか出しておいてね」
「はーい」

そんな会話をしながら私はトマトを輪切りにする。一個も使わなくていいだろう、半分くらい切ったところで手を止め、残ったトマトをラップで包み冷蔵庫に入れる。そして先ほど準備しておいた野菜と切ったトマトを器に盛り付けていく。そしてサラダは完成した。

「でっきた～、ふぅ・・・うん、いい出来ね。我ながらばっちり、センスを感じるわ。」
「あら本当、きれいにできたわねフーカ。」

後ろからいきなり声がする、ママだ、もう卵は焼き終わったのだろうか？私は聞いてみることにした。

「ママ、もう卵は焼き終わったの？」
「えぇ、ばっちりよ。」

そんな会話をしていると階段から誰かが降りてきた、まぁこんな時間に降りてくるとしたら一人しかいないのだが、しかしあの子が誰も起こしに行かず起きてくるとは珍しい、なにかあったのだろうか？

「おはよ～」

そういってあくびをしながら2階から降りてきたのは、私の妹高町なのは。私と同じ私立聖祥大附属小学校に通っている、私とは1つ違いだから、今は3年生ね。あぁ、そういえば私の紹介がまだだったわね。私の名前は高町フーカ、私立聖祥大附属小学校4年生ここ高町家では下から2番目の兄妹にあたるわね、1番下はさっき紹介したなのは、その上に私、姉さん、兄さん、と続いていくわ。姉さんと兄さん、後パパはまだ紹介してないわね、まぁ後で紹介するから待っといて。私はママと一緒になのはに朝の挨拶をする

「はいおはようなのは」

「おはよーなのは、今日は珍しいわね、私に起こされずに起きてくるなんて」

「にゃにゃ！？そ、そんなことないもん！なのはいつだって自分でおきてるよ！」

そう腕をぶんぶん振りながら反論するなのは、朝から元気なことだ。

「はいはい、そうねぇ、なのははしっかり、自分で、起きれるもんねぇ・・・」

私はにやにやしながらしっかりと自分でと言うところを強調して喋ってやる。

「う〜〜〜おねぇちゃんはいじわるです。」

頬をぷく〜っと膨らせながらすねるなのは、わが妹ながらかわいいではないか、これだから妹いじりはやめられない。私がなのはで遊んでいるとママから制止の声がかかる

「ほらほらそろそろやめなさいフーカ、なのはは道場で士郎さんたちを呼んできてくれる？」

「「はーい」」

そういってなのはは道場の方に向かっていく、うちは昔ながらの武家屋敷というか、とにかく敷地が広いのだ、私たちが生活している母屋、そして外に道場、それに池までである。正直ここまで広くしなくてもよかったんじゃないだろうか？そんなことを考えながら私は朝食をママと一緒に並べていく、すると玄関の方から音がする、おそらくなのはがパパたちを連れて帰ってきたのだろう

「いやぁ、いい匂いがするなぁ、今日の朝食もおいしそうだ。」

そういいながらリビングに入ってきたのはパパだ、ママと同じ喫茶店翠屋でマスターをしている。名前は高町士郎、パパの入れるコーヒーはおいしいって評判で、パパのコーヒーを飲むために翠屋に来てる人もいるくらいなんだって。私はあの黒い水のなにがおいしいのか全然わかんないんだけどなぁ。

「母さん俺たちは着替えてから降りてくるよ。」

「それまで悪いけどちょっと待っててくれないかな？」

「えぇいいわよ、待っててあげるから早く着替えてきなさい」

そう言って自分の部屋に戻っていったのが、私の兄さんと姉さん、

高町美由紀と高町恭也。二人ともパパから剣術って奴を習ってるらしい、だから朝はいつも道場で稽古をしている、それで兄さんはもう師範としてやっていけるらしくて、姉さんに剣術を教えているみたい。

そして皆そろって朝ご飯を食べる。他の家庭とおそらく何も変わらないであろう朝ご飯、しかして我が家の食卓には二つ欠点がある、それは。

「う～ん今朝もおいしいなぁ、特にこの、スクランブルエッグが。」

はじまった・・・そう我が家の朝の食卓（まぁ厳密に言えば朝だけではないのだが）の欠点の一つそれは、約９０％の確立で発生するパパの惚気だ。

「本当に皆、感謝しろよ？こんな料理上手のお母さんをもてて幸せなんだから、わかってんのか？」

「わ、わかってるよ、ねぇ？なのは、フーカ。」

「「うん」」

確かにそれはそうだ、こんなに料理上手でやさしいママをもって幸せだと私は思う、だが！だが、だ！朝っぱらから甘甘な新婚ムードを漂わすのはやめてほしい、別に甘く作ったわけでもないのにご飯が甘くなってくるような気がする。そしてもう一つの欠点それは。

「お？美由紀、お前リボンがまがってるぞ」

「え？本当？」

「ほら、貸してみろ」

これだ、うちの両親には劣るがこの二人もだいぶ中がいい。なん

というか、もっと歳を考えろといいたくなるほどの中のよさなのだ。こんな朝の食卓の中、はっきりいって浮いてる感が半端ない、きっとなのはも私と似たようなことを考えているんだろうなと思いつつ、私はなのはの顔を見る、やはり、少し苦笑いだ・・・おや？私はなのはの口元が少し汚れているのに気づいた、やれやれ、みっともない、自分で気づけないのか。しょうがないから教えてやろう。

「ちょっとなのは、あんた口元汚れてるわよ？」
「え？嘘！どこ？どこおねぇちゃん？」
「右、右よ！あぁもうそこじゃないって。じれったいわねぇ、ちょっとじっとしてなさい」

歯がゆくなった私はなのはの口についた汚れを指でぬぐってやる。

「ったくもう、にぶいんだから」
「あはは、ありがとう、ごめんね？おねぇちゃん」
「別にいいわよ、ごちそうさま～私そろそろ行くね」

指についた汚れをなめ取りながら私は席を立った。それなりにまだ時間はあるが、私は多少余裕をもって行動する性質なのである。

「わぁ！まっておねぇちゃん、なのはも行く！」

そう言って急いで食事を終わらせ始めるなのは、本当にこの子は・・・少し苦笑しながら私が、待っててあげる、と伝えるとなのはは少し落ち着いたようで、ゆっくり食事をし始めた。

そしてなのはが食べ終わるのを待って登校、うちの学校はバスが

通ってて、それに乗って私たちは学校に通ってる。

「じゃね、おねぇちゃん。」

「えぇ、じゃね。」

そういいながらなのははバスの奥の方にむかって行く、奥のほうに座ってる子達がなのはに手を振っていた、名前はアリサとすずか、なのはの親友だ、私もよく知っている。すると二人が私にも手を振ってきた、私は少し笑いながら手を振り返す。そんなことをしていると、声をかけられる。

「おぉ、ふーちゃんこっちこっち」

私に向かって狭いバスの中で手を振っているのは沖　美代子、私の親友である。

「おはよう美代子、今日もあんたはげんきねぇ～。」

「なははははは、私は元気だけがとりえだもんねぇ。」

そう言って美代子と話しながらバスに揺られていく。

「そういえば知ってた？今日４時間目の授業、江ノ島の授業に変わったんだって。」

「げぇ！マジで？やってらんないわぁ、またあのオカルト話を延々と聞かされなきゃなんないのね・・・あぁ欝だわ。」

「だねぇ、あの人授業はわかりやすいからいいんだけど、絶対空き時間作って自分の知ってるオカルト話をしてくるからねぇ。」

「それさえなけりゃいい先生だとは思うんだけどね。」

そんな話をしてるうちにバスが学校に着いた、さて、４時間目を

どう切り抜けようか。

・
・・
・・・
・・・・

そんなこんなで４時間目、科目は社会、江ノ島の授業だ。最初の２０分は普通の授業だった、そろそろか・・・そう思った時、おもむろに江ノ島がこっちに顔を向けて喋りだした。

「さて皆さん、今日もいろいろ面白い話を持ってきましたよ。ひひひひひ、なんの話をしましょうかねぇ・・・」

”別に何も話さなくていいよ”おそらくクラスの皆の心が一致していることだろう。だが私たちの気持ちなど気づくことなど無いまま、江ノ島は喋りだす。

「ふむ、ではこの話にしましょう、皆さんは悪魔、と言うものを知っていますか？」

［ドクン！！］

それを聞いた瞬間私は言いも知れぬ感覚に襲われた、懐かしいような、恐ろしいような、嬉しいような。いろんな感情がない交ぜになって、私はその感情の波に流されそうになっていた。

「と、言うわけでして。さまざまな目撃証言もあります、腹にポシェットのようなものをつけたペンギンを見ただとか、鎌をもった幽霊を見ただとか。他にも［キーンコーンカーンコーン］・・・おや、もうそんな時間ですか。では授業を終わります、またいろんな話を持ってきますので、楽しみにしていてくださいね。くくくくくくくくくくくくくく」

いつの間にか授業は終わっていたようだ、江ノ島が気味の悪い笑い方をしながら教室から出て行く。そこで美代子に声をかけられた。

「ねぇねぇどしたの？ふーちゃん。」
「え？どうしたって、なにが？」

私は美代子の言ってることがわからなかったので、聞き返した。

「いやね、ふーちゃん江ノ島の話がはじまってからずーーっとぼけーってしてたからさ？具合がわるいのかなーって。」
「あぁ、あれね、だいじょぶだいじょぶ、なんでもないから、心配しないで、美代子。」
「うーん、まぁふーちゃんがそう言うならいいんだけどね？」

どうやら心配をかけてしまったらしい、私は美代子にごめんねと言いながらお弁当を出す、そうしたら美代子はまぁいいんだけどね？といいながら自分の弁当を出した、そして二人でお弁当を食べながら話す、内容はさっきの江ノ島の話だ。

「しかし今日も江ノ島の話は意味わかんなかったよねぇ、なんかつい最近蝙蝠が多いのはある悪魔が人間界を調査してるからだ～とか、犬が夜にやたらほえてるのはここに近々狼の悪魔が降臨するからだ～とか、わけわからないことばっかり、そんなの小学生の私でも嘘だってわかるよ、ねぇ？ふーちゃん、・・・ふーちゃん？」

私は何か違和感を覚える、まるでその話に出てきた悪魔とやらを知っているかのように思うのだ（ソウダ、コウモリハアノヒトノケンゾクダ。）いやそんなことは無い、だって私は悪魔なんか信じてないし、そういうオカルトな本も読んだことは無い。だがこの違和感は何なのだろう（イヌハ、アイツニオビエテイルノダロウ。）これは・・・この違和感は一体

「ふーちゃん！！」
「ふぇっな、何？美代子。」
「何？じゃないよ、もう、ほんとにどうしたの？今日のふーちゃんさっきから変だよ？さっきから呼んでも呼んでも答えてくれないし。お弁当も食べてないし、ほんとに大丈夫なの？」

どうやらまた少し呆けていたらしい、本当に今日はどうしたのだろうか？自分でもそう思う。さっきから美代子に睨まれ続けている、すこし気まずくなったので私は言い訳を考える、

「あは、あはははははは。ごめん、ちょっと疲れてるのかも、昨日みてた番組が面白くてさ。ちょっと夜更かししちゃったのよ。」
「むーーーーーーーーー・・・」
「あは、あはははははは、はは。」
「わかったよ、もう聞かない、でもほんとに調子悪いなら言ってね？」
「うん、ありがと、ごめんね？美代子」

なんとか誤魔化せたみたいだ。だが美代子は本当に勘が鋭いからまた調子が悪いと見抜かれてしまう、気をつけよう、あまり無駄に美代子に心配はかけたくない。

その後は他愛も無い話をしながら昼休みを過ごし、その後の授業もいつも通りだった。

そして放課後、なにやら用事があるらしい美代子と別れ、私は帰路につく、１年ほど前まではなのはと一緒に帰っていたのだが、なのはが急に塾に行くと言い出し、それ以来私たちは別々に帰っているのだ。

ーーーーーー・・・・助けて・・・・ーーーーーー

「ん？」

今一瞬声のようなものが聞こえた気がした、私はあたりを見回す、しかし回りに人はいない、この道は、この時間帯人があまり通らないのだ。

ーーーーーー・・・・助・・て・・・・ーーーーーー

まただ、また聞こえたような気がする、しかしさっきよりもかすれてて聞こえにくい、幻聴だろうか？だとしたら私は相当疲れているようだ。

「早く家に帰って寝よう。」

そういって私は足早に家に帰る道を急いだ、きっと疲れてるのだ。

その日の夕飯時なのはがいきなりフェレットを飼いたいと言い出した、私的には賛成なんだが、さてパパとママはどういうのか

「というわけで、そのフェレットさんをしばらくうちであずかるわけにはいかないかなーって？」

「ふぅむ、フェレットか・・・」

パパが考え込む、なのはは身を乗り出して次の言葉を待った。

「ところでなんだ？フェレットって？」

［がくっ！］ママ以外の全員がこけそうになる。いやギャグとしてもそれはないわよパパ。

「鼬の仲間だよ父さん」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ？」

「パパ、さすがに今の流れでそれは無いわよ。」

そこに私達のフォローが入る、次にママが話し出した

「フェレットってちっちゃいわよね？」

「知ってるのか？」

その質問にたいしなのはは、手で大きさを表現しながら答えた。

「うーんと、これくらい。」
「しばらくあずかるだけなら、籠に入れておけて、なのはがちゃんとお世話できるならいいかも。恭也、美由紀、フーカ、どう？」
ママが私たちに意見を聞いてきたので、私は即答えを出した。
「私は賛成。」
「俺も、特に異存はないな。」
「私も。」
その言葉になのはが目を輝かせる。
「だ、そうだよ？」
「よかったわね。」
パパとママの言葉になのはは元気よく答えた。
「うん！ありがとう。」
その後の夕食はそのフェレットの話で持ちきりだった。
そして夕飯を食べ、服を着替えた私はもう寝ようと思いベッドに腰掛けていた。
［キーーン］
「っ」

いきなり耳鳴りがした、私はうるさくなって頭を抱える。

「ったく何だってのよもう、今日は昼から晩まで最悪じゃない。」

するといきなり人の声がした、聞いたことのある男の子の声だ。

［聞こえますか？僕の声が聞こえますか？］

あぁよく聞こえている、だからこの耳鳴りを止めてくれないだろうか、切実に。

［聞いてください、僕の声が聞こえるあなた、お願いです、僕に少しだけ力を貸してください。］

なんだ？力を貸せ？よくわからないが困っているのだろうか？しかし聞いたことがある声だと思ったら、夕方の帰り道に聞いた声ではないか。どうやらあれは幻聴ではなかったらしい。

［お願い僕のところへ！時間が、危険が！もう！］

［キーーン］

声が聞こえなくなった、これは・・・かなりやばいんじゃないだろうか。そう思った私はとりあえず身支度を整えることにした、あれだけ必死に訴えかけられて、それを無視した日には、後味が悪くておちおち寝ていられないからだ。まず服を着替える、さすがに私はパジャマのまま外に出るほどの猛者ではない。服を着替え終わってから気づく、あの声は危険と言っていた。なら少なからず危ないことが怒るのだろう、私は何かの足しになるだろうと思い自分愛用の木のバットを手に取りボールも何個かもつ。準備完了。

「さて、行きますか。」

そのまま私は玄関へと向かう、すると見知った顔が見えた。

「なのは？」

「にゃにゃ！？お、おねぇちゃん？どっどど、どうしたの？」

なのははびっくりしたようで、かなりどもっている。それはこっちの台詞だと言いたかったが、私も急いでるので何も追求しないことにする。

「なのは。あんた何するのか知らないけど、ちゃんと気をつけて行ってくるのよ？」

「え？う、うん。」

「じゃ、あたし近くのコンビニに行ってくるから。」

そういいながら私は走っていった、よくわからないが、そこら辺を走っていれば見つかるだろう。

３０分後

「むきゃーーーーーーーーーーーーー見つかんないーーーー。」

３０分、私はとりあえず人がいそうなところを探してまわった、

が！見つからない。確かに倒れている人などそうそう見つかるとは思わないが、それにしても見つからなさすぎだろう。

「本当は幻聴だったのかしら・・・だとしたら私かなり疲れてんのね。あーあ、無駄なことした。帰ろ。」

そう思って家に帰る道を進もうとしたとき。

［ドガン！！！！！］

いきなり大きな音がして振り返った、あれは確か槙原動物病院の方だ、くそっ正反対ではないか。

「あぁもう！今日は本当に最悪ね！」

そういいながら私は走り出した。

そして槙原医院の近くにある住宅街に差し掛かったとき、すぐ近くで桜色の柱が立つのが見えた。私は直感したあそこだ！！そこから私はさらに速度を上げる。

「ったくもう！なんなのよ。これで何も無かったら明日なのはを一日中いじり倒してやる！！」

そして私はさっき桜色の柱が伸びた場所についた、そこで私は信じられないものを見てしまったのだ。

「なの・・は？」

そこにはなのはがいた、しかし、何かおかしい、まず第一になのはは私服のまま出て行ったはずだ。なのになぜ制服を着ているのだろう（それに細部が少し違っている）。そして第二にあのごつい棒はなんだ？たしか玄関にいたときはあんなものもってなかった、ならばあの後部屋にとりに行ったのだろうか？いや、なのはの部屋にあんなものは無かった。第三に、これが一番重要なんだが、なのはの後ろに生えてるあの黒い塊はなんだ？（アレハキケンナモノダ）私の中の何かが叫ぶ。私はその言葉が自分の中でささやかれたのと同時に走り出した、とにかくあれをなのはから離さなければ！

「こんの！！」

足に力をこめる、想像するのは夢の中の私、なぜだか思う、あの夢は現実だって、だからあの夢の中の私にできて私にできないことは無いのだ。

「黒まりもぉ！」

なのはが私に気づく、とても驚いていたがそんなことは気にしてはいられない。

「私の妹にぃ！」

幻聴の声と同じ声が聞こえる、しかしそんなものは関係ない。黒まりもはターゲットを私に決めたのか、私に向かって突進してきた。関係ない、足を踏ん張りバッティングの構えをとる。自分の体中に力がめぐってくるのがわかる。

そして、私は。

「なぁに！」

自分が持ってるバットを。

「してくれてんのよおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

目の前に迫ってきている化け物に向かって振り切った。

［ばきぃ！！！］

するとバットは真ん中でたたき折れた。しかし折れたバットの先端のように、私に向かってきた化け物は吹き飛んでいった。そして私は後ろを振り返り言った

「なのは！無事！」

「う、うん。大丈夫だよ。」

どうやら大丈夫だったようだ、私は安易する、そしてこのままなのはをつれてこの場から離れようと思ったそのとき、私はいきなり聞こえてきた声に足を止めざるおえなくなった。

「・・・・・・・・・ありえない」

フェレットが、喋った？・・・あぁ今日は本当に最悪だ私は再度そう思った。

第1幕～崩れた日常～（後書き）

どうも、作者のネコカブリです。

私の名前は高町フーカ、第1幕、楽しんでいただけましたでしょうか？戦闘シーンは次の話のときになります。なにぶん何もかもが初めてなので、うまく書けるかわからないのですが、それでもがんばっていいものに仕上げようと思っています、どうか皆様、見守っていて下さると嬉しいです。

では、第2幕で会いましょう、こんなつたない文を読んでいただきありがとうございました。

第2幕～危機からの帰還～（前書き）

歯車（うんめい）は動きだし、次々と周りの歯車（うんめい）を動かしていく、ガラガラとガラガラと。

そのきっかけ（歯車）はとても小さなもの、しかしその小さなきっかけ（歯車）はいずれ、より大きな運命（歯車）を動かすことになる。

私の名前は高町フーカ、第二幕、上がります。

第2幕～危機からの帰還～

私たちは今走っていた、無論さっきの化け物から逃げるためである。そうあれは大体5分前。

「フェレットが喋った？」

私の思考は一気に停止した、さっきからわけのわからないことばかりおこっているが、これは不意打ちだった。だがそんな風に停止していた私の思考は奇しくも私の思考を止めていた本人（人？）によって引き戻された。

「気を抜かないで！！来ます！！」

その言葉で私は透かさず後ろを振り返る、するとさっき吹き飛ばした化け物が私ではなくなのはに向かって突進をしかけていた、”やられた”私はそう思った、あの化け物め、まずは弱い方からしとめる気だ、くそっ！

「なのは！！！」
「おねぇちゃん！？」

私は叫ぶと共に、なのはの上に覆いかぶさる。バットも折れてしまい、さっきのように体中に力がめぐってる気もしない、それでもどうにかしなければ。そして私は次に来るであろう痛みに備えた、だが。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

聞きなれない声と共に［どごぉ！！！］という、硬いものに何かがぶつかる音が聞こえた。

「な・・・に？」
「え？え？えぇ！？」

いつまでたっても痛みがこない、私はおかしく思って恐る恐る目を開けてみた、するとそこには・・・桜色の壁にその進行を防がれている化け物がいた。そして次の瞬間。

［バジュン！！］

風を切るような音と共に、化け物が四散したのだ。私は目の前で起きたことが理解できず、少し呆然としていたが、すぐに気を取り直しなのはの手を握って走り出した。そして冒頭に移る、というわけである。

そして走ってる最中私はフェレットに説明を求めた、アレはなんだ・・・と、なのはも気になっていたようで走りながらブンブンと

首を縦に振っている。で、そのフェレットからの説明をまとめるとこうだ。

１つ、なのはがさっき使ったものは魔法と呼ばれる力らしく、発動体をつうじて術者の精神エネルギーを使い発動体に組み込まれたプログラムを行使する、それらのことを総称して魔法と呼ぶらしい。なんか違和感があるが―（特にプログラムとか）これはまぁいいとしよう

そして２つさっきなのはが粉々にした化け物は忌わしき力とやらで具現したジュエルシードという古代遺産の暴走体らしい。

最後に３つ、これが一番重要、アレをおとなしくさせるためには、より強力な魔法が必要らしく、呪文を唱えて封印をしないといけないらしい。

「と、いうわけだからとっとと呪文を唱えなさい、なのは」
「何がというわけなの！？全然わかんないよ！？」

いきなり話を振られたからだろう、なのはが困惑気味に反論してきた、生意気な妹である。

「うるっさいわねぇ、今のところあんたがどうにかするしかないんだから、がんばんなさいよ。」
「うぅ、おねぇちゃん無責任です、というか！なんでこんなところにいるの？おねぇちゃんコンビニ行くって「あーあーあー聞こえなーい。」むぅ、もういいよ。」

なのははすねてしまったのか目をつむってしまった。

［ガラ］

すると不意に瓦礫が崩れたような音がした、私は振り返る、するとそこには。

「そんな、もう！？予想以上に再生が早い。」

フェレットが焦ったように声を上げる、そこには、あの化け物が生えていた。狙いはやはりなのはのようだ。

「なのは。」

私はなのはに喋りかける。

「なに？おねぇちゃん。」

「何秒かかる？」

脈絡の無い問い、だが私たちにはこれで充分だった。

「２０秒」

「遅い１５秒ね。」

短い問答の後私は走り出し、ポシェットに入れてあったボールを１個取り出す。そして私はそれを

「鬼さんこちら！手の鳴る方へ！！！」

思いっきり化け物に向かって投げた、［ボス！！］そんな音と共に私の投げた球は化け物の体に突き刺さる、化け物は怒ったのか標的を私に変えてきた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！』

化け物は叫び声をあげながら私に触手をのばしてくる。

「よっ、ほっ、とあっ、あぶなっ！？」

それを私は何とかかわしていく、するとなのはから声が上がった。

「おねぇちゃん！、ＯＫだよ！」
「よし来た！、さすがは私の妹！」

そういいながら私はなのはのもとへ走っていく、そして・・・もうすぐなのはの所へつく、そう思ったとき

「っ！！」

足にあの化け物の触手がかすってしまった、幸い血は出ていないようだが、私はバランスを崩しこけてしまう。

「おねぇちゃん！？」

なのはが私を呼ぶ、心配そうな顔だ、だがそんなことは気にしてられない、私は痛みをこらえながら叫んだ。

「なのは！今よ！！」
「っ！うんリリカルマジカル！」

なのははは一瞬言葉に詰まったようだが問題なく自分の心に浮かん

できたらしい呪文とやらを唱える、するとそれに続きフェレットが口を開いた。

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード。」

そしてなのはがフェレットの言葉の続きを言う。

「ジュエルシード、封印。」

『Sealing Mode. Set up.』

するとなのはの持っている杖が喋りだし、その形を変えた。そして桜色の帯が化け物を絡めとる。

「ウオオ！！」

瞬間、化け物が苦しみだし、その額に英数字が浮かび上がった。その後もなのはは封印を続けていく。

『Stand by. Ready.』

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアルXXI、封印！」

『Sealing』

なのはがその言葉を叫んだ直後、なのはの杖からさらに多くの帯が化け物に伸びていき、化け物は光って小さな宝石に変わってしまった。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

「う、うん。」

なのはは、言われるままに手に持っている杖を宝石へと近づけた、すると。

『Ｒｅｃｅｉｐｔ．Ｎｏ．ＸＸＩ』

そんな声が杖から聞こえ、宝石は杖の先端の赤い部分に吸い込まれていった。その直後なのはの体が桜色に光だし。

「あ」

玄関から出るときにきていた服に戻っていた。

「ありがとう、あなた達のおかげで、」

そう言ってフェレットは倒れた。

「ちょっと、だいじょうぶ？ねぇ？」

なのはが焦って声をかける、だが私は違うことに焦っていた、これは、この聞いたことのある不吉な旋律は。

「なのは、そのフェレットの心配してるとこ悪いんだけど、ずらかるわよ。」

「え、なんで？」

「おばか！周りを見てみなさい、そしてよーく耳をすましてみなさい」

するとなのはもこの状況に気づいたのか顔を青ざめさせた。

「あのー私たちってこのままではだいぶアレなのでは？」
「えぇかなりピンチね、と・い・う・わ・け・で・・・・ずらかるわよ！！」
「ごめんなさ～い」

そして、私たちは近くの公園のベンチに腰を下ろしていた。周りではパトカーがサイレンを鳴らして走り回っている。

「だぁ！つっかれた～、本当に今日は最悪だわ。」
「はぁ、はぁ、はぁ、ふ～、本当にそうだね、なんか今日は凄くいろんなことがおこるよぅ。」

そんなことをいいながら私たちは息をととのえていた。すると

「すいません・・・」

いつの間に起きていたのか、なぜかフェレットが私たちに謝りだした。

「あ、起こしちゃった？ごめんね乱暴で。」
「あんた、その包帯見るに怪我してんでしょ？無理しない方がいいわよ？ゆっくり休んでなさい。」
「いえ、大丈夫です、あなた方に助けていただいたおかげで、魔力をすべて治療にまわすことができました。」

フェレットはそういうと、おもむろに自分に巻いてある包帯をはずしだした、その包帯の下には怪我など一切無かった。私はへぇ、としか思わなかったが、なのははとても驚いている。

「ふえぇ、すごい、あんなにひどかった傷がなくなってる。」

「そんなにひどかったの？」

私はフェレットがどれほどの傷を負っていたのか気になり、なのはに聞いてみることにした。

「うん、すぐに傷跡がなくなるような怪我じゃ無かったよ？」

「はぁ、魔法ってすごいのねぇ。」

そんな話をしていると、なのはが忘れていたというように喋りだした。

「あ、そうだ自己紹介まだだったね、してもいい？」

「あ、はい。」

「じゃぁ、私から、私の名前は高町なのは。小学校三年生、家族とか、仲良しの友達はなのはって呼ぶよ。」

まずなのはが自己紹介をする、次にフェレットが喋りだした。

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから、ユーノが名前です。」

「ユーノ君、かぁ可愛い名前だねぇ。」

そしてユーノが自己紹介を終え、私の番がやってきた。

「私は高町フーカ、そこのなのはの姉よ。小学校４年生で、大抵の

人にはフーカって呼ばれてるわ。」

そして全員の自己紹介が終わった途端、ユーノはうなだれてしまった。

「すいません、あなたたちを。」

そこでなのはがユーノを持ち上げる。

「なのはだよ。」

「自己紹介したんだから、ちゃんと名前で呼びなさい、私はフーカよ。」

自分の名前を教えたのだ、それなのにいつまでも他人行儀でいてもらっては困る。

「なのはさんと、フーカさんを、巻き込んでしまいました。」

何を言っているのだこの小動物は、私はそう思った。巻き込んだことで謝るくらいなら、最初から助けなど呼ばなければ良かったのだ、ったく。

「あんた馬鹿じゃないの？」

「え？」

「おねぇちゃん！？」

私の言葉に私以外の全員が驚く。だが私は、そんなのにはお構い無しに言葉を続ける。

「あんたが、自分の意思で、私たちに、助けてほしいって言ったの

に、謝ってんじゃないわよ、そんなことされたら助けに来た私たちが馬鹿みたいじゃない。」
「ぼ、僕はそんなつもりじゃ。「そんなつもりもなにも無いわよ、あんたが助けを私たちに求めた、そしてそれを聞いた私たちがあんたを助けに来た、そして最後に巻き込んでごめんなさい？それは違うでしょ？なんであんたを助けた私たちが謝られなきゃいけないのよ、もっと他に言うことあるでしょ？」
「え？」

私の言葉にユーノは意味がわからない、といったように呆然としている、その横で私の言いたい事がわかったのか、苦笑いしているなのはがユーノの援護に回った。

「おねぇちゃんはね、ユーノ君に謝ってほしいわけじゃないんだよ？もっと別の言葉を言ってほしいんだと思うな。」
「あ。」

その言葉にユーノは何かに気づいたように私を見る。

「なのはさん、フーカさん、助けてくれてありがとうございました。」
「まぁ、合格ね、なのはの助けがあったのは少し減点対象だけど。」
「じゃあ、一段落したところで、家に帰ろう？ユーノ君もこのままだと辛いでしょ？」
なのはの一声にて私たちはひとまず家に帰ることにした。

そして家に帰ってる途中、なのはが私になぜあの場にいたのかを

聞いてきた。

「まぁ多分あんたと同じよ、ユーノの声が聞こえてきて、それが助けてっていってるからね。流石にこれをほおっておいたら寝覚めが悪いと思って、町中を走り回ってたのよ、そしたら大きな音が聞こえて、後はあんたたちが知ってるとおりよ。」

「へぇ、そうだったんだ、あ、じゃあコンビニに行くって出てったのは。」

「そういうことね。あーあこんなだったらあんたをこっそりつけてたら良かったわ。」

「にゃはははは」

そんな話をしているとふと私はあることに気づいた。

「ねぇユーノ。」

「はい、なんですか？」

「あんた、その敬語やめなさいってさっきから言ってんじゃない。」

「え、あ、はいじゃなくて、うん、ごめんね。それで、どうしたの？」

「まぁいいけど。んとね、あんたの声が聞こえたってことは私にも魔法の才能があるってことよね？」

私の質問にユーノは少し難しそうな顔をして答える。

「まぁそうだね。」

「何よ、その顔は？」

「いや、フーカの魔力は不思議な感じがしてね。」

「「不思議な感じ？」」

私だけでなくなのはも気になったのか声をそろえてユーノに疑問

を返した。

「うん、大抵の人の魔力の大きさって成長して大きくなる以外は変化ってあまり無いんだ、魔力を蒐集されるとか、その人が意図的に隠そうとするとか、そういう特殊なことが起こらない限りね。でもフーカの魔力は大きくなったり小さくなったり凄く不安定なんだ、だから僕が発信した念話も聞き取りづらかったんじゃないかな？」

私はユーノの言葉に今日の昼のことを思い出す。

「確かに、どこかかすれたような声が聞こえたりしたわね。」

「でしょ？だから一概にフーカに才能があるとは言えないんだよね。まぁあの暴走体を吹き飛ばした身体強化は凄かったけど。」

「たしかにあれはすごかったよねぇあんなに大きいのをこうカッキーンって」

「なによあんたたち、私のことを怪力って言いたいの？」

そんな話をしていると、ようやく家の前まで着いた、さて問題はこれからだ。

「どうやって兄さんたちに見つからないように部屋にもどるか、ね。」

「コクコク」

そう、もうこんなに遅い時間だ、兄さんたちが心配して外で待っているかもしれない。そしてそれにつかまると即座にお説教コースだ、それだけは嫌なので、私達はこっそり家に入ることにした。

「いいなのは、ゆっくりゆ～っくりよ」

「うん」

そんな風にこそこそしている私達に後ろから声がかかる。
「随分遅いお帰りだな。」
［ビクッ！！］
私達は聞き覚えのある声にびっくりして後ろを振り返った
「「兄さん（お兄ちゃん）」」
そう、我らが兄、高町恭也である。
「こんな時間までどこに行っていた？」
少し不機嫌そうな顔で兄さんは私たちに問いかけてきた、これはまずい、何かうまい言い訳を考えなければ。
「えっと、あの・・・その・・・」
「にゃ、にゃはははははは・・・はは」
私たちは苦笑いでごまかしながら一歩一歩後ろへと後ずさっていく、怖い、あのマリモよりも数段怖い。
「あれー？なのはの持ってるその子って、夕飯の時言ってたフェレット？かわいー。」
冷や汗をだらだらかきながら、焦っていた私たちの後ろからこれまた聞き覚えのある声が聞こえてきた、

「姉さん（お姉ちゃん）！？」

私たちの姉、高町美由紀その人である、まさか姉さんまで潜んでいたとは・・・これは絶体絶命のピンチなのでは？現に横にいるなのはも顔が引きつっている。

そんなことを思っていると思わぬところから援護が入った。

「もしかしてなのはたち、この子が心配で様子を見に行っちゃったのかな？」

「う、うん！そうなの、この子見つけた時にすごい怪我してたからし、心配で。」

「そ、それで、さすがに一人じゃ危ないからって運よく玄関でなのはを見つけた私がついて行ったのよ、ね？なのは？」

「コクコクコク」

まさかの姉さんからの援護、私たちはその勢いに乗ってこれでもかというほどに言い訳を喋る、どうやら納得してくれたみたいだ。兄さんはまだ不機嫌そうだがなんとか誤魔化すことができたみたい。

「だが、しかし「もういいじゃない恭ちゃん、なのはもフーカもいい子だから、もうこんなことしないよね？」・・・むぅ。」

まだ何か言いたそうな兄さんを姉さんがなだめてくれている、だが心配をかけたのは本当だし私たちは素直に謝ることにした、兄さんだって言いたくてああ言ってるわけではないのだ、それぐらい私にだってわかる。

「「心配掛けてごめんなさい、兄さん、姉さん（お兄ちゃん、お姉ちゃん）」」

「ふむ、まぁいい、今度からは誰かに声をかけるんだぞ？いいな？」

「「うん（はい）」」

その後、家に入ったらパパもママも待っていて、ママは笑っていたけど怖くって、パパには軽い拳骨をもらった、そして少し遅くまでユーノの事について相談して寝ることになった、うぅ、やっぱり今日は厄日だわ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜そのころ海鳴神社〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

何の変哲もない神社の鳥居、その柱の下に青く光る宝石があった、ジュエルシードである。

そのジュエルシードに近づく人影が一つ

「クククククククク、これがついさっきのおかしな魔力反応の原因ですか、これはこれは、また不思議な力を感じますねぇ、ヒヒヒ、悪魔のものでも魔法使いのものでもない、かといって魔力ではないというわけでもない、何の神秘性もない、魔力と似た波長のエネルギーといったところですか。これは要観察ですねぇ・・・ヒヒ」

その男はひとしきりジュエルシードを眺め、持っていた手帳に何かしら書き込むと、そのページをちぎり、近くの草むらに捨て、ジュエルシードをそのままにしてその場を去った、残されたのはジュエルシード一個と、男が草むらに捨てた紙だけであった。

第2幕～危機からの帰還～（後書き）

すいませんかなり遅い更新になりました、しかも前より短い、本当に自分の文才の無さを痛感しています、ネコカブリです。

あぁ文才がほしい、それが無理ならせめてひらめきがほしい。

ご意見ご感想、お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3670u/

私の名前は高町フーカ

2011年9月4日21時29分発行